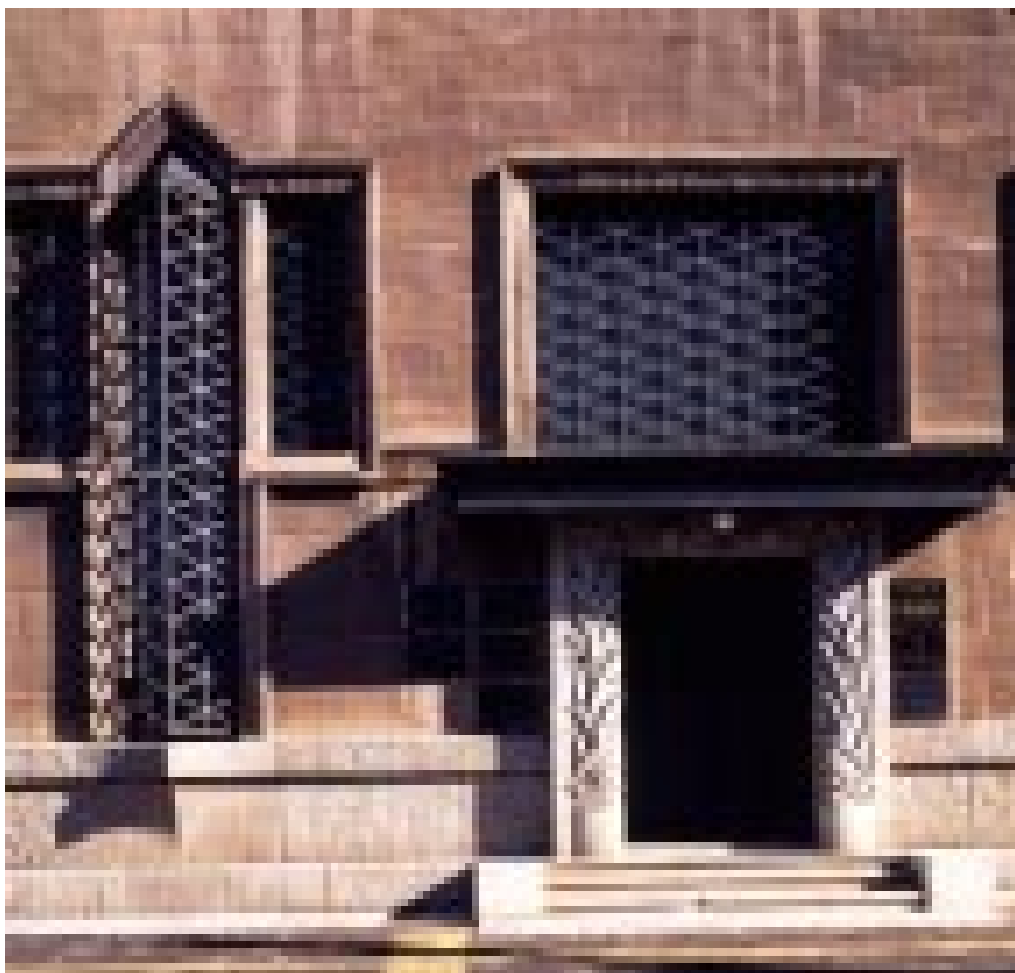


JIA news kinki



no.095/2005

秋号





表紙写真：第一合同銀行本店 外部意匠
(撮影：上田恭嗣)

□表紙解説 - 第一合同銀行本店 外部意匠

他に類を見ない独特な風貌を示している。ある意味では利用者にとって威圧的に感じられ、近寄りがたさも与えていた。倉敷の土を用い製作したのではないと思われる赤茶色のブロック仕上げは、雨に濡れると一層赤みを増し、特異な風景を醸し出していた。

CONTENTS

連載

「西国巡礼古道を歩く」	勝村一郎	3
「デザイントーク」	吉村篤一	5
「住宅部会通信2005」	大嶋 明	9
	三木孝亮	10
「建築家の視点」	横関正人	11
「都市点描」	馬場正哲	12

情報

新入会員紹介	13
リレーエッセイ	
「編集後記」	

□地方に生きたアール・デコの建築家 - 薬師寺主計

その5 外部の特徴ある意匠

中国銀行旧本店の外観は、水平線を強調した特徴のあるパラベット部のデザインと、重々しい威厳のある風貌等から、ドイツ表現派の影響を強く受けたものと考えられる。薬師寺主計はこの建物の計画を依頼された後、渡欧しており、長くベルリンにも滞在していた。外壁の仕上げ材として、基壇部の腰部分にはノミ切り仕上げの北木島産(瀬戸内海)の錆花崗岩が用いられている。パラベット部分はドイツ製のリシン仕上げがなされ、外壁はドイツ製法によるブロック(工事概要には「技術石張り」と表現)を使用し、岡山では決してみられなかった超近代的なデザインで、他の建物を圧倒した。

外部意匠については、一、二階吹き抜けの営業室に設けられた特異な窓のデザインを挙げることができよう。偶然ではあろうが、後の中国銀行の「中」の字を予測したような形状をしており(創設時は第一合同銀行本店)、あまり類を見ない窓廻りのデザインといえる。窓の上部には三角錐の小屋根がついており、三角形に突出した鋼製の出窓枠、そしてその中に三角形に組まれた鋼鉄製の格子が入っている。余談ではあるが、現在の中国銀行本店(岡山市)の建替え時に、この窓の形を継承していただくよう強くお願いし、新しい建物にも取り入れられた。



鋼製扉のデザイン

玄関の入り口部には、門構えとしての大きな錆花崗岩が人を出迎える。植物のアロエをデザインモチーフとし、とげとげしい形のレリーフが施されている。薬師寺は植物をデザインテーマに用い、曲線で鋭角的な造形を試み、アール・デコ特有のデザインとして表現している。玄関入り口扉は左右鋼製の二枚折りたたみ戸で、外側には鉄細工による正方形を組み合わせた鋼板が張り合わされ、アール・デコの特徴でもある鉱物的な表現も見られる。

参考文献：上田恭嗣「アール・デコの建築家薬師寺主計」山陽新聞社2003
(ノートルダム清心女子大学人間生活学部教授 上田恭嗣)

西国巡礼 古道を歩く

連載 第7回

大和の街道 古道

勝村一郎

(勝村建築設計事務所)



西国巡礼古道というテーマで6回にわたって進められてきましたが、奈良を担当するにあたり大和の街道・古道をいくつか分類しながら記述する必要がありますと考えました。聖地をめざす修行道、集落と神の里が一体になった古道、大和朝廷が造った官道、都市間を結ぶ街道、集落を結ぶ生活道などの分類、形成年代、直線・曲線、平地・山岳など現在も奈良盆地の主要な道として利用されている道の多くが対象になります。

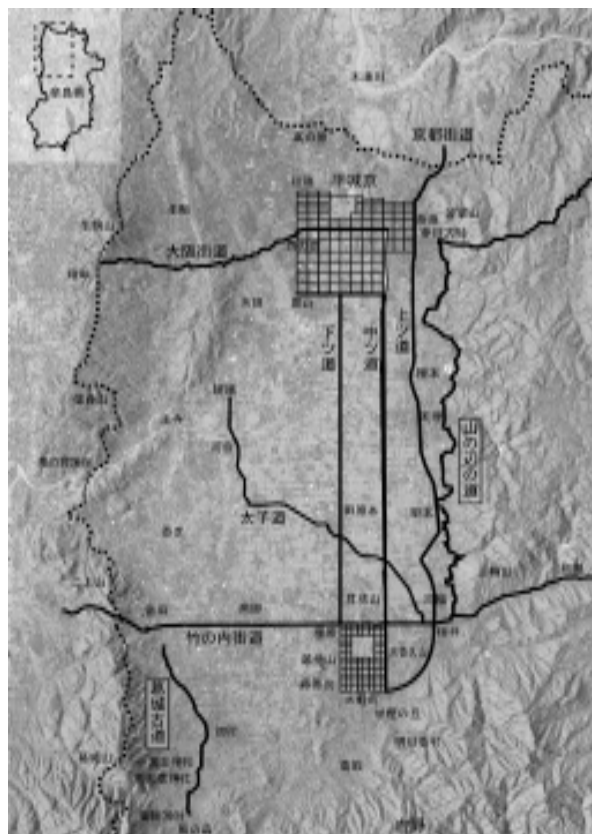
■大和の街道

大和の街道は年代により大きく3つに分類できます。縄文、弥生・古墳時代からあったと考えられる古道、平城京遷都に伴い飛鳥と平城京を結んでできた街道、平安から江戸にかけて京都・大阪と伊勢と大和を結んだ街道です。奈良時代以降の街道が都市と都市を結ぶ道であるのに対し、古道は聖地を結んでいました。第1回は大和の古道についてお話しします。奈良盆地には東山麓に位置する山辺の道、西山麓を巡る葛城古道、吉野から熊野・伊勢・高野をめざす熊野古道があります。いずれも古事記・日本書紀など日本最古の文献に登場し、その遥か以前からあったと考えられる道です。

■山辺の道は、日本書紀にも記されているわが国最古の道といわれ、奈良盆地の東山裾を桜井の海柘榴市（つばいち）から奈良までを結ぶ全長約26kmの古道で、途中大神神社（三輪）から檜原神社、景行陵、崇神陵を経て天理の石上神社までの15kmがよく知られています。大神神社は三輪山を御神体として祀ります。大神をおおみわと読みます。三輪山は、奈良盆地をめぐる青垣山の中でもひとときわ形の整った円錐形の

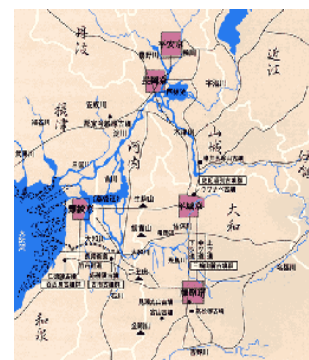
山で、古来より神の山として、『古事記』や『日本書紀』にも記されるように神体山として信仰され、本殿は設けず拝殿の奥にある三ツ鳥居を通し三輪山を拝するという、原初の神祀りの様が伝えられており我が国最古の神社です。柳本の南を少し西に行くと大和神社があります。【おおやまと】と読み、二千年の歴史を持つ神社で、戦艦大和の名はここから取られました。

■古代（六世紀以前）、大和盆地に勢力をふるっていたのが東山麓の三輪一族と西山麓の葛城一族の二豪族で、大和朝廷が成立する以前に



大和の街道と地形

西国巡礼古道を歩く



近畿の都と街道

出典：『国土交通省近畿地方整備局
大和川河川事務所HP - 古代畿内要図』

王朝を築いて国を治めていたとされています。また、御所市一帯、特に二上山から風の森にかけては日本神話のふるさとともいわれ、神々が住まわっていた高天原は、その昔、葛城山・金剛山の山麓にあったと伝えられています。このように神代の時代から数々の史実の舞台になった「葛城古道」は全長13キロメートルの古道です。大阪から竹内街道で二上山脇の竹内峠を超え、大和三山・明日香を眼下に見降ろしながら下るとそこが当麻の里です。当麻から葛城山・金剛山添いに南に山裾を辿るのが葛城古道です。笛吹古墳群を背後に持つ笛吹神社、櫛羅（くじら）、一言主神社、土蜘蛛塚、高天彦神社を経て、風の森・高鴨神社にいたる道は、遥か大和三山から若草山まで大和平野を見渡すことのできる高原です。鴨一族（4世紀）の総本社・「高鴨神社」、葛城氏（5世紀）の祖神を祀り葛城山山麓深くにひっそりと近寄り難い神秘性を持つ「高天彦神社」、雄略天皇（在位456～480）との狩など説話に登場する一言主を祀る「一言主神社」、約700にも及ぶ巨勢山古墳群などがあります。「高鴨神社」は全国の鴨（賀茂）神社の本家にあたる神社で、京都の上賀茂神社、下鴨神社も系列のひとつです。葛城古道の南端、高鴨神社がある「風の森」は現代的なひびきがありますが、中国大陸から吉野に吹く霊風の通り道として神話に登場し、山麓に風の神を祀る祠があるところから、古い歴史のある地名と言われています。稲作が生まれた「風の森」は大和川水系と紀ノ川水系を分ける分水嶺であり、大和平野から遠望すると青垣の中で最もなだらかで広大な丘陵です。

■世界遺産にも登録された熊野古道は熊野三山・高野山・吉野・伊勢を結ぶ長大で険しい修行のための山岳道で、吉野は入り口のひとつです。熊野古道については県境を超えた三県で【熊野古道特集】としてまとめてはどうかと思い、あえて記述を省略いたします。

■「山の辺の道」や「葛城古道」はなぜ山麓をめぐっているのか。古代集落の多くが奈良盆地の中央ではなく標高60メートル以上の高台に位置するのはなぜか、疑問に思っていたのですが、「山の辺の道」と「葛城古道」について調べを進める中で、かつての大和平野は現在とは比べ物にならないほど河川が広く、湖や沼が存在していたのではないか、という思いが強くなりました。海石榴市（つばのいち）は遣随使小野妹子たちが大陸から帰って来て上陸した港であり、王仁（わに）らが「論語」を持って上陸したのが軽市、現在の橿原市大軽町、葛城山麓の櫛羅クジラ大湊、御所の船路、いずれも古代からの船着場であったといわれています。他にも忍海（おしみ）・船宿・海知・保津・結崎など、水（海）を連想する地名も多く、奈良県中南部の当麻御所・三輪・明日香にはかつて大和盆地に「大和湖」なる浅い湿原があり、当麻から対岸の明日香に舟で往来していたと謂う伝説があります。機会があれば「古道＝陸の道」と「水」、「集落」との関係をもとめてみたいと思っています。

デザイントーク

2004年度 第3回 (2004 / 11 / 25開催)

今回は最近中之島に竣工して話題を呼んでいる「国立国際美術館」の設計を担当した、シーザーペリ&アソシエーツ・ジャパン大阪事務所で、基本計画の段階から現場監理までを担当された高原浩之さんに美術館と、その近くにできた「中之島三井ビル」について語っていただき、もうひとつは「ゼンカイハウス」でJIA新人賞を受賞され、その後も斬新な作品を発表されている宮本佳明さんに2軒の住宅作品「苦楽園」、「SoHo」について発表していただいた。お二人ともこれからの活躍が期待されている若手建築家である。

【評者】・岡本 隆(日建設計)・小島 孜(近畿大学)・本多友常(和歌山大学)・吉羽裕子(I.F.A)
・吉村篤一(建築環境研究所)

■ 高原浩之氏 /

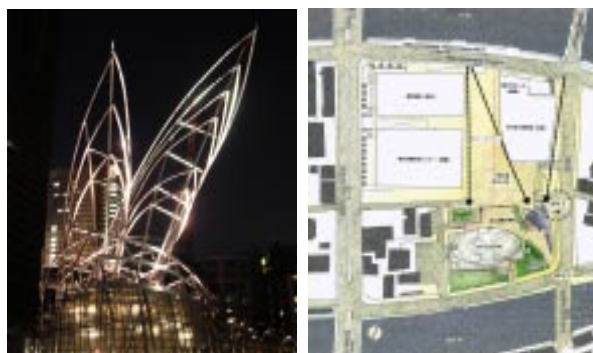
シーザーペリ&アソシエーツ・ジャパン大阪事務所

- ・ 国立国際美術館
- ・ 中之島三井ビルディング

高原氏はシーザーペリの大阪事務所で国立国際美術館のプロポーザルの段階からこのプロジェクトにかかわってこられ、工事監理まで担当者のひとりとして携わってこられたとのことである。現在は独立されてご自分の事務所を主宰されているが、今回は当時の担当者として美術館の基本設計段階から出来上がるまでの経緯とコンセプトを語ってもらった。

国立国際美術館は大阪万博のときに川崎清氏の設計で千里に建築されたものを今回中之島に移転し、シーザーペリの設計で展示室を地下に設けたもので、最近竣工し話題を呼んでいるが、当初は1995年に安藤忠雄、黒川紀章、日建なども参加してプロポーザルが行われた結果、シーザーペリ事務所が受託したということである。

敷地は中之島の科学博物館と堂島川にはさまれており、それほど広くない土地であるので地上は広場として利用し、展示室は地下に設けるという条件であったという。ペリ事務所ではこの敷地条件から地上は堂島川と土佐堀川をつなぐ広場とし、親しみやすい美術館となるよう、



デザイントーク

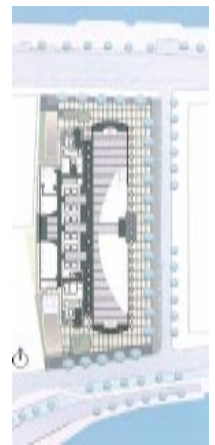
地下に入る部分にシンボリックなモニュメントを提案したということであった。地上にはこのモニュメントだけがあり、あとは全て地下でB3FとB2Fが展示室となっていて、B1Fはフリーで入れるようになっており、地上と同じプラザという考えである。モニュメントはステンレスパイプでできているが、竹のイメージで考案されたものであり、竹を編んだものという発想らしい。これに関してはコンピューターを駆使して図面や模型で検討しながらかなりのエネルギーをかけたということであった。しかしながら、この造形が果たしてアートの世界でどのように評価されているかがよくわからないという発言があった。ということは、あの“ステンレスの籠”にはエントランス空間があるだけであり、ほとんどはオブジェであるから誰かアーティストとのコラボレーションがあったほうが良かったのではないかということを示しているのかもしれない。しかし、素材はともかくとして、地上のモニュメントを線材で構成したことは視界が通るということもあり、ひとつの解としてはよかったのではないかという発言もあった。

また、地下空間と地上のエントランス及びモニュメントとの関係を示した断面図により展示空間や地下のパブリック空間と地上のエントランスとの連続性についての議論があり、図面からはその連続性が感じられないのではないかという意見に対して、地上のモニュメントと地下のミロの壁画のある空間が主体になって地下に沈めることが重要な要素であるから必ずしもつながっていることが良いことかどうかかわからない、という意見も出た。

いづれにしても展示空間を地下に沈めて、地上は広場とエントランスだけ、というのはあの敷地の特徴を考えればかなり正解に近いと思われるが、となりの科学博物館のボリュームとの関係がどうしても納得できない、という意見に会場の人たちは納得させられたようだ。

最後に、「中之島三井ビル」は美術館の近くにある超高層オフィスビルであるが、やはり堂島川と土佐堀川を結ぶということをコンセプトにして、一階のコンコースをパブリックゾーン

とし、店舗などを配して南北に通り抜けができるように考えられている。また、外装はステンレスを多用したハイテク感のあるスレンダーなビルで、周囲のビルの間であってひととき光を放っている。他にも大阪市内でシーザーペリ事務所として参画したものに市立博物館・NHK会館があるということが付け加えられた。



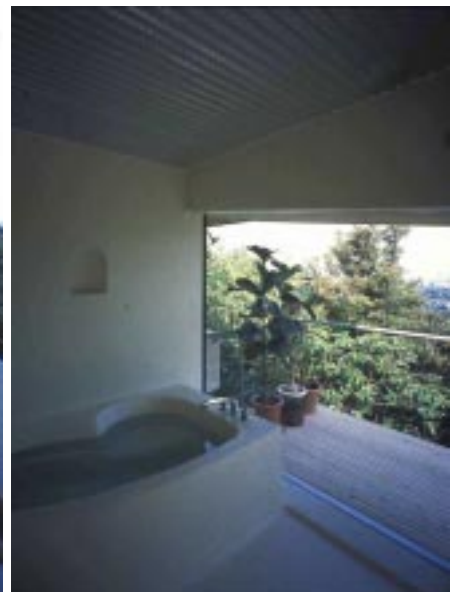
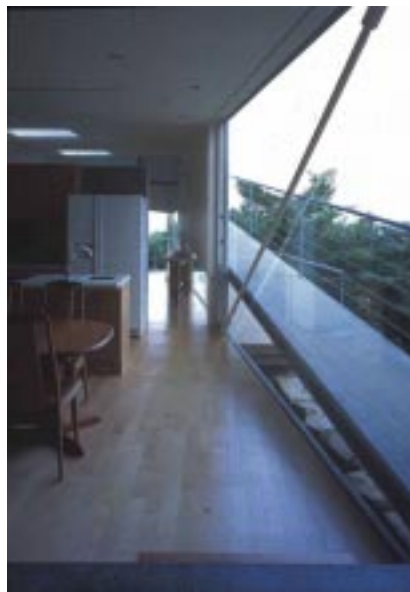
デザイントーク

- 宮本佳明氏 / 宮本佳明建築設計事務所
- ・ 苦樂園
- ・ SoHo

宮本佳明氏は大阪芸術大学でも教鞭をとっておられ、若手建築家の中でもいろんな意味で問題作を発表されており受賞作品も多いが、今回の二作品はどちらかといえば素直な作品といえるものであろう。別に今までのものが素直でないわけではないが、やはり、経験を積むことによって備わったものが素直に出ていて、以前のものより着実にレベルアップしていると感じられた。

まず、「苦樂園」は傾斜角度30度以上という急斜面に立てられた住宅で、その場所の持っている特性が即この建築の特性になるよう設計したというまさに素直な見解であった。敷地の特性を生かすということは建築で一番大切なことでもあり、かつ基本的なことでもある。敷地には以前邸宅が建っていて平地になっているとこ

ろがあるが、そこには建築せずに、傾斜面を選んで建築したということである。また、この敷地からは素晴らしい景色があり、人口にすれば約一千万人の人たちを見渡すことができる、という変わった表現の眺望に関する説明があった。とにかく近畿地方の中心地を一望の下に見渡せる素晴らしい敷地である。そこに住まい手の要望を取り入れながら、傾斜地に建てる時のセオリーを自分で設定し、独自の造形力と表現力を駆使してデザインされており、この眺望を十分楽しめる魅力的な住宅になっている。浴室が一番先端にあり居間は奥にあるのも、クライアントの要望とのことで批判をさしはさむ余地はない。とにかく全てがこの傾斜地の特性を生かすための手法であるという説明により、聴衆は納得させられたようであった。



デザイントーク

「SoHo」は周辺に建売住宅やメーカー住宅などの建つ特徴のない住宅街の中で、その中に埋没することのないよう、間口が狭く奥行き長い敷地の長さを強調した計画となっている。内部空間は立体的なワンルームで、玄関がやや唐突な感じがするが、全体がスキップフロアーになっていて流れるような空間構成である。北側はとりとめもない家が建っているので壁で固めて南側に開いた住まいとなっている。

いずれの住宅も内部空間は変化があり、それぞれの住み手のライフスタイルに合わせて巧みに構成されていることはわかるが、人が住まうということを外から見たときの風景あるいは景観といったことから、住まいの外観のあり方を別の意味から考えられないだろうかという意見

があった。これは大変難しい問題であるがまた重要な課題でもある。人にはそれぞれ違ったライフスタイルがあるが、それを設計者が汲み取ってそれぞれ違った表現の家をつくっていくと町並みとして美しくないないので、素材や色などをそろえるといったルールを設けるほうが良いのか、それぞれの住宅が何らかの主張を持って建てられ、ある程度の質が保たればそれはある意味でよい街並みであると考えるか、といった問題にも波及するだろう。いずれにしても今回は質の高い作品が多く、重要な問題に関する議論もあり、有意義なデザイントークとなった。それにしても、いつもながら会場の参加者からの発言が少ないのは少し寂しい気がする。もっと積極的に発言していただきたい。
(まとめ 吉村篤一)



住宅部会通信 2005

講演テーマ「生体リズムとあかり」

担当世話人：三木孝亮、豊辺弘也

三木孝亮
(Atelier Collage)



去る6月9日(木曜日)、18:30~20:00、出席者40名により、大阪市本町のTOTOテクニカルセンター2Fにて6月例会が開催されました。

当日は、松下電工株式会社、中央照明エンジニアリング総合部、部長である片山就司氏を講師としてお迎えし、とても興味深いお話を聞くことができました。

講演のテーマとしては『生体リズムとあかり』・『明るさ感について』であり、人間にも他の動物と同じように体内時計(生体リズム中枢)があり、睡眠・覚醒・ホルモン分泌・体温変化などの時間的コントロールを行い、生活サイクルの基盤となっていること。また、その生体リズムは『光』の影響が最大の要因となって変化するなど多くのスライドをまじえての講演会は、ひじょうにわかりやすいものでした。お年寄りや子どもの生体リズムとの関係や睡眠障害・うつの治療を『光』にて行うことなどその内容は、多岐にわたるものとなっていました。

一方、『明るさ感』という新しい尺度の概念やその単位の算出方法の説明なども受け、大変興味がそそられました。

スライド講演終了後も活発な質疑応答がなされ、会話が盛り上がる中、終了のときを迎えることになりました。



片山講師の横で挨拶する大江会長



熱心に聞き入る受講生達



講演後に受講生と語る片山講師

住宅部会通信 2005

5月例会のご報告

担当世話人 湯川 君雄 / 大嶋 明

大嶋 明

(大嶋明建築設計事務所)



先日の5月21日に開かれた住宅部会の5月例会は、大阪府立狭山池博物館の見学会と大阪教育大学の吉田靖雄名誉教授の講演会で、参加者は14名でした。今回の企画は、池田銀行の外郭団体である自然総研が主催するセミナーに参加させていただく形で行なわれました。

はじめに、狭山池を望む堤防の上で、博物館の学芸員のから狭山池の河内和泉丘陵での位置関係等の説明を受け、博物館ホールにて吉田靖雄名誉教授の「行基～仏教と政治との葛藤」と題した講演をお聞きしました。

講演では、行基が実際に治水開墾事業を手がけたのは当時の平均寿命をはるかに越えた50歳前後からで、82歳で亡くなるまでに数多くの事業を主に大阪平野で手がけたということにまず驚かされました。さらに、身分の低い裕福な商人から集めた資金で多数の人々を配下にした一大技術者集団を形成し各地転々として事業を行っていたということですが、当時の支配階級である貴族からは当初は反政府組織として警戒の目で見られていたそうです。しかしながら、次第に治水開墾により民衆の生活を豊かにしようとしている行為であると理解されるよう

になり、最後には聖武天皇により、下級僧侶から一気に仏教界の頂点である大僧正に抜擢されたということなど、興味深いお話をいろいろお聞きしました。

講演の後は、再び学芸員の案内で館内の展示の説明を受けながら、平成の大改修で出土した治水遺構を見学しました。館内には高さ15.4m底幅6.2mに渡って堤を切り取り、時代ごとの遺構が断面でわかる展示を筆頭到大正時代に作られた取水塔などをそのまま残したものなど、巨大な展示が数多くありそのスケールの大きさに驚きました。また、それを包むコンクリートの塊壁は土堤～コンクリート製のダムという連想なのでしょうか？どちらが展示物かと思間違うほどの迫力でした。

見学会の後は有志で駅前の「つれづれ草」という和食料理の店に寄りました。この店はこの地域でも評判名店で、なかなか丁寧な仕事の美味しい料理をリーズナブルな価格で頂きました。



両側を滝で囲まれた親水アプローチ



治水遺構断面の展示

「空家民家の 活用を考える」

横関正人

保存再生委員会（NEOGE0）



先日、兵庫県青垣町の空家民家の相談があり、有志数名で現地見学を行いました。

青垣町は氷上郡（現丹波市）でも北西部の一角を占め、町西端に三国岳と呼ばれる峰があるとおり播磨・但馬・丹波の旧三国の接点に位置しています。

加古川（佐治川）の源流域にあたりますが、その支流である遠阪川流域及び遠阪峠は古代山陰道の確実な通過点と考えられ、近世には但馬街道が通じ現代に至るまで但馬地方との交流の窓口として機能しており山間部の閉塞感はありません。

町内には古代山陰道の「佐治駅」推定地や、鎌倉時代武蔵国足立郡より新補地頭として来住した足立氏・信濃から移った芦田氏などの土豪が築いた山城・館跡などの遺跡などのほか、紅葉で有名な臨済宗中峰派高源寺など名所・旧跡が数多く遺されています。

また貴重な民俗文化財として丹波布や、翁三番そうなどが地元の努力で現在まで伝承・保存がなされています。

最初に見学に行った佐治は、京都・大阪と山陰を結ぶ古代山陰街道の宿駅でした。古来から物資が集まり、佐治市場と称し、旧氷上郡を代表する商業町を形成し、明治には家畜市場を設けて発展し、製糸業の隆盛と共に郡内一の賑わいを呈しました。現在は商店街を形成しており呉服商等の商家の街並みは、取り囲む緑の山稜をアイストップに妻入り中二階の家屋に築地塀がセットになった佐治独自の町並みを形成しています。特に法的規制はなくても良質な町並みが現在も残っています。

さて、見学したいくつかの空家民家ですが、元々茅葺き屋根のものが多く、現在は住まわれていないもの、都会に出てしまってお盆と正月に帰省する程度に使用するもの、完全に雨漏りして廃屋状態になっていました。

青山町は自治会で立ち上げた集落のNPOが2つあり、空き家の世話や都会からの田舎暮らしを斡旋していくようなことを模索しています。

都会から違う地域に来た場合、その地域の風習等わからないことが多々出て、トラブルの原因となるが、そのフォローもNPOでやろうというのである。

他の地域ではあまり考えられないコミュニティが存在しています。

この様なきっちりした受皿はあるのですが、今度は改修する費用がどこからも出ない。と言うことでたちまち計画がストップしてしまっています。

みなさんもよくご経験されているのではないかと思います。他府県の例では、島根県は空家活用制度がきっちりしておりUターン住まい支援が充実しているそうですが、それでも上限が250万ということなので本当に簡単な改修しか出来ません。

実はこれは、他でも同じで私の関わっている富田林市寺内町では、重要的建造物群保存地区であるため助成金はあるのですが、基本的には外部空間を対象として、内部空間までの積極的な提案は中々受け入れられません。

しかし、それは建築家の職能の向上を考えながら、残していきたいという意欲でやっている所は多々あります。

事務所の採算考えると出来なくなります。それでも関わっていきたくて思っていますが、みなさんはどの様にお考えでしょうか。



活用された民家



活用されていない民家



佐治のまちなみ



青垣町の風景

まちの「公」の再生

馬場正哲

(地域計画建築研究所)



中心市街地の低迷とまちの機能

地域の中心市街地が低迷しているといわれて久しい。かつて商店街では、店の間口の大きさと前の通行量とでその店の売上げが想定できた。しかし、その人通りがなくなり、消費者は曼荼羅需要で、主婦だからといって特定の消費パターンに当てはめられなくなった。

また、食料品や日常雑貨などの基本消費財は、市場・商店街から、郊外的大型量販店に取られ、最寄商店街としての雰囲気と賑わいも奪われてしまった。地域の生活は商店街の専門家に任せろといった気概も忘れ去られている。

一方、中心市街地の低迷問題は、商業機能だけのことだろうか、まちの多様なサービスや助け合う仕組みに及び、住民生活の見えないところでの問題発生が気懸りである。

商業者と消費者のギャップ

尼崎の市民買物調査と商業者意向調査にかわり、消費者と商業者とのギャップが明確となった。例えば、市場・商店街の問題については、「空き店舗」や「魅力的な個店が少ない」を両者が強く指摘するなか、評価は、消費者の8割は「まだまあまあ魅力あり」とし、商業者の半数は魅力なしと諦めている。「空き店舗」を問題としながら、後継者がいなく自分の代で店を閉じるつもりと考えている商業者が少なくない。

消費者の「期待」に応えようとすれば、事業者の新規参入をスムーズに進めない限り、商業集積地の空き店舗はますます増えていく。市場・商店街の魅力が支持されているうちに、地域づくりのビジョンを持ちながら、店舗の私的所有から、活用意識を持って空き店舗を流動化させていくことが課題であるといえる。

まちとひとの変化を受けて

尼崎の商業地で周辺人口が増加している地区は、「JR尼崎駅周辺」のみであったが、平成12年以降の動向を見ると、市内の駅周辺で利便性の高い地区では、社宅や工場跡地を中心にマンションなど住宅建設が目立っている。公害イメージからの脱却と市街地整備などにより、尼崎市でも都心回帰の傾向が表れつつあり、商業集積地の役割やポテンシャルを再認識する必要がある。

人のライフスタイルの多様化とともに、店舗形態や販売形態の多様化も起きており、ライフスタイルの変化に合わせた閉店時間の見直しや、ターゲットとする購買層の絞り込み、顧客や消費者ニーズに合わせた商品とサービスの提供など、個店それぞれの頑張りが今まで以上に問われている。同時に、まちとしての対応が強く求められる。

まちの「公」を取り戻す

また、少子・高齢社会のなか、団塊世代のリタイアを踏まえると、まちに24時間滞留する人口が急増する。この現象は、逆にまちの共助の仕組みが機能しないと大きな社会問題となるが、地域の地域による地域のためのガバナンス成立への必至の条件ともなる。

まちとひとの変化とその対応は、住民・事業者など地域主体の自覚から、まちとなりわいと安全・安心を考える、まちの「公」を取り戻すところから始まる。「なるようになった」から「なるようにする」地域の自覚と役割分担と連携の新たな公の発揮が求められる。特に、事業者のまちのサービス専門家としての復権と中心市街地の役割再生に期待したい。

新入会員紹介

滋賀県	岡田 哲史	滋賀県立大学環境科学部	兵庫県	尾瀬 くみ	尾瀬耕司・くみ建築事務所
滋賀県	門坂 章	アサヒ設計	兵庫県	福岡 隆夫	福岡建築事務所
滋賀県	陶器 浩一	滋賀県立大学環境科学部	兵庫県	福田 浩明	福田建築工房
京都府	安井 清	やすいきよし事務所	大阪府	大道 一弘	大道建築設計事務所

リレーエッセイ

船場の町割り - 2

前回に続いて船場の町割りについて一言。

40間（約80m）四方の1街区を南北に2分する形に「背割下水」（いわゆる太閤下水）が設置され、東西間口が7軒程度に分割されたため、標準的宅地は東西6間・南北20間ということになる。南北の「筋」を注意して歩くと、「背割下水」の痕跡も見えてくるので、是非挑戦してもらいたい。

船場の町は、東西の「通り」の南北が同じ町名で、いわゆる「両側町」の形態が現在も踏襲されている。ちなみに京都では、東西・南北のどちらの道路に対しても「両側町」であるが、大阪はあくまで東西方向の「通り」の南北が「両側町」である。

丁目は大阪城に近いほど若い番号で、「通り」を東に歩いて東横堀川を渡ると町名の頭に大阪城に近いという意味で「内」が付けられる。（例：平野町と内平野町）

1街区が40間四方であることと町名の規則性を知っておれば、船場の町はほとんど地図なしで歩けます。一度、試してみてください。（井上 守）

編集後記

景観法が昨年（2004年）12月17日に施行されました。

この法律は、地域の住民が自分達の基準で地域の景観を創っていかうとするもので、美しい景観を創るため、これからますます住民の自治能力が問われるのでしょう。

地域計画や建築設計を職業とする私たちも、地域の多くの方々と一緒になって美しい景観づくりに取り組むことが求められています。

これからはあらゆる機会を通じて多くの方とメッセージを交換したいと思います。その意味からも「JIA建築家大会」、「近畿建築祭」や広報誌の役割は大きいのでしょう。

読者と建築家の距離を近づけ、多くの方に気軽に読んでいただける連載として2003年に始まった「西国巡礼古道を歩く」は、近畿各地域会から執筆者を得て、滋賀、京都、大阪、兵庫、和歌山、奈良と連載してきました。

今回で全ての地域会を一巡したところです。

近畿各地の古道が、地域の人ならではの切口から語られてきました。今後は年6回の発行となり、おおよそ年1回、近畿各地を巡ることになります。

メディアとして本来は冊子であってほしいのですが、ホームページとなったこれからも、一般の方を含めただけ多くの方に語り手である建築家のメッセージを届けたいと思います。（広報委員 内藤 正）

広報委員会

委員長	小南一郎（大阪）
副委員長	小池啓夫（大阪）
委員	足立成美（京都） 一尾晋示（大阪） 井上 守（大阪） 太田恭司（大阪） 木戸口浩之（京都） 瀧川嘉彦（和歌山） 佐々木純一（大阪） 佐藤洋司（大阪） 柴田敬四郎（奈良） 内藤 正（滋賀） 森崎輝行（兵庫） 横関正人（大阪） 大江一夫（住宅部会長）
事務局	穴井宏樹 木田明生 緒方英輔
発行日	2005年9月30日（秋号）
発行人	出江 寛
発行	社団法人 日本建築家協会近畿支部 〒541-0051 大阪市中央区備後町2-5-8 綿業会館 TEL06-6229-3371 FAX06-6229-3374 ホームページ http://www.jia.or.jp/kinki メールアドレス jia@bc.wakwak.com

表紙 第一合同銀行本店 外部意匠（撮影：上田恭嗣）